

TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM

MUSE | 2024.9 Vol.45

帝国データバンク史料館だより [ミューズ]

■巻頭特集

近世商傑伝

馬越恭平・田附政次郎・安田善次郎・渋沢栄一・古河市兵衛

■輝業家交差点 近代につぼんを彩る人物往来

江副 孫右衛門

西欧技術の導入とユニフォーミティーの追求

日本窯業の近代化を推進した立役者

■資料にみる企業の歴史

金融機関における信用調査の歴史と信用調査機関

近世商傑伝

馬越恭平・田附政次郎・安田善次郎・渋沢栄一・古河市兵衛

本誌で連載中の「輝業家交差点」。近代日本において、事業を興し、企業を立ち上げ、経営の改革・再興に力を尽くし、社会に貢献したさまざまな“輝”業家たちの足跡を、毎号専門家に紹介していただいています。戦前に帝国興信所（現：㈱帝国データバンク）が発行していた経済紙「帝国興信日報」においても、実業家を取り上げた伝記シリーズが連載されていました。その名も「近世商傑伝」。毎日発行される新聞には連載読み物が付き物ですが、「帝国興信日報」でも毎号読み物が連載されていました。今回は、日報の紙面を彩った5人の商傑を紹介します。



「帝国興信日報」の連載小説

「帝国興信日報」は、経済動向や、法人個人の営業状態、倒産情報、訴訟や不動産売買などの情報を掲載する経済新聞です。1906（明治39）年に「帝国興信所内報」の名称で調査会員に企業情報を提供する目的で創刊して以降、「帝国興信日報」、「帝国興信所報」、「帝国タイムス」と名前を変え、時代時代の経済情報を広く発信してきました。

新聞紙面は、ニュース以外にも、コラムや広告、連載小説などさまざまな記事で彩られます。表は「帝国興信日報」に連載された読み物を抽出し、一覧にしたものです。

昭和初期に、16タイトルの読み物が連載されていました。最初は「樺太回顧録」や「新説赤穂忠誠記」など講談師による歴史ものが多くみられましたが、徐々に実業家の伝記が多くなっていきます。「近世商傑伝」シリーズには、馬越恭平・田附政次郎・安田善次郎・渋沢栄一・古河市兵衛の5人が取り上げられました。

◆「帝国興信日報」掲載一覧

	タイトル	作者	画作者	連載期間
1	樺太回顧録	伊藤痴遊	山本英春	1927年3月3日～1928年6月15日
2	新説赤穂忠誠記	桃川如燕	山本英春	1928年6月16日～1929年10月23日
3	三井の礎	邑井貞吉	近藤紫雲	1929年10月24日～1930年4月12日
4	幕末風雲草紙	松林伯知	近藤紫雲	1930年4月13日～1931年8月9日
5	明治太平記	寺島征史	野口紅涯	1931年8月11日～1932年6月29日
6	燃ゆる魂	渡邊黙禪	石井滴水	1932年6月30日～1933年3月29日
7	刃影明闇相	仲木貞一	石井滴水	1933年4月6日～9月7日
8	満州建国賦	米田華航	村瀬春映	1933年9月9日～1934年12月25日
9	死面は哭す	堀健吉	畠野奎三	1934年12月27日～1935年10月16日
10	近世商傑伝 馬越恭平	桜木恭輔	田中敏彦	1935年10月17日～1936年1月28日
11	近世商傑伝 田附政次郎	桜木恭輔	田中敏彦	1936年1月29日～5月21日
12	北支那百怪伝	米田華航	村瀬春映	1936年5月22日～1937年8月26日
13	近世商傑伝 初代安田善次郎	桜木恭輔	福田八郎	1937年9月16日～1938年2月15日
14	古今不景気物語	石田三郎	—	1938年2月22日～8月10日
15	近世商傑伝 渋沢栄一	寺島征史	村瀬春映	1938年8月11日～12月30日
16	近世商傑伝 古河市兵衛	寺島征史	村瀬春映	不明(1940年)

特に「近世商傑伝 初代安田善次郎」は読者の反響が大きかったため、1938（昭和13）年5月15日に書籍化しています（常設展示室にて展示中）。序文で帝国興信所二代目所長の後藤勇夫は、次のように述べています。「武人に非ず政治家に非ざるいわゆる財界人にこれを見る時、その事績には『世界地図の色分けを変へる』程の華やかさは無い。が、その代り、物質的に、産業的に、そして文化的に、偉大なる財人が遺す処はまことに絢爛たるものがある」。事業を成し遂げた財界人の生涯には数々のドラマがあり、学ぶことも多く、その伝記は今も昔も多くの人々に読み継がれています。

東洋のビール王 馬越 恭平 (1844-1933)

三井物産創立からの古参社員であった馬越恭平は、日本麦酒の重役として出向し、経営再建を成功させます。1896（明治29）年には三井物産を退社してビール事業に専念、1899年には銀座に日本初のビヤホール「恵比寿ビヤホール」を誕生させました。1906年、大日本麦酒株式会社（現：アサヒビール㈱、サッポロビール㈱など）の社長に就任。「東洋のビール王」と呼ばれ、100以上の企業の役員を歴任し、財界の長老として君臨しました。



馬越恭平
提供：公益財団法人三井文庫

「近世商傑伝」では、馬越が実業界に足を踏み入れるきっかけとなった益田孝（のちの三井物産初代社長）との出会いの場面から始まっています。



相場至上主義 田附政次郎 (1864-1933)

東洋紡・日清紡ホールディングス・江商(現:兼松株)の設立に関与し、綿糸相場師として活躍しました。

1876(明治9)年、叔父・伊藤忠兵衛の紅忠店で丁稚奉公しながら国産麻布業の取引を学び、1889年に独立、大阪で綿糸布商(のちの田附商店)を開業。1894年、大阪三品取引所の創設に関わり、のち大阪紡績取締役、山陽紡績社長他、初代大日本綿糸布商連合会委員長に就任しました。売りを得意として勝ち抜き、「田附將軍」と呼ばれました。「売るべし、買うべし、休むべし」など数々の名言を残し、天下の相場師として名を馳せた田附政次郎の豪胆な生涯が、全85回の連載に描かれています。



田附政次郎
田附商店編『田附政次郎傳』



銀行王 安田善次郎(初代) (1838-1921)

安田善次郎は、安田銀行(現:みずほフィナンシャルグループ)を始め、現在の損害保険ジャパン株式会社や明治安田生命保険相互会社、東京建物株式会社などを設立し、「銀行王」と呼ばれました。安田は、巨万の富を築きながら、社会的な責任を果たしていないという理由でテロリストの凶刃に倒れますが、実際には東京大学の安田講堂や日比谷公会堂など多くの公共事業に寄付をしていました。「陰徳」を信条としていたため、その善業は世に知られず、守銭奴のイメージが強く残りました。

安田の死から約16年後に連載された「近世商傑伝」は、守銭奴のイメージを払拭し、儉素に自らの理想・信念に生きた安田を再評価するものでした。



安田善次郎
国立国会図書館「近代日本人の肖像」



Column 作者:寺島 柁史について

渋沢栄一と古河市兵衛の商傑伝を書いた寺島柁史(1893-1952)は、北海道根室出身の作家で、近代史を扱った歴史小説のほか、児童向けの冒険小説や科学に関する書物など多数の作品を残しました。安田善次郎の商傑伝の作者は桜木恭輔ですが、書籍化した『近世商傑伝 初代 安田善次郎』の作者は寺島柁史となっています。寺島は多くのペンネームを使っていたといわれ、おそらく桜木恭輔は寺島のペンネームの一つであったと思われます。

近代日本経済の父 渋沢栄一 (1840-1931)

渋沢が亡くなってから約7年後の連載。冒頭では、前に連載していた安田善次郎の経歴が平凡で何ら粉飾の余地がなく、禪話にでもありそうな味わいが随所にあるのに対し、渋沢の経歴は派手で、曲折があつて、まことに多彩であり、講談もどきに面白いと評しています。

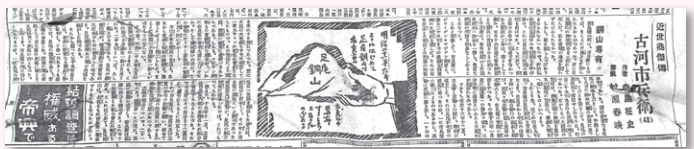
渋沢栄一の「近世商傑伝」は、現在テーマ展示コーナーで全文を閲覧できます。



鉱山王 古河市兵衛 (1832-1903)

渋沢栄一の連載後から戦前にかけての「帝国興信日報」はほとんど残っていませんが、この間唯一存在を確認できる商傑伝が、古河市兵衛のものでした。

古河財閥の創始者である古河市兵衛は、小野組にて生糸貿易に手腕を振るいましたが、1874(明治7)年の小野組破綻後は独立し、東京に古河本店を開業します。渋沢栄一らの資金援助で銅山を中心とした鉱山経営を行い、足尾・草蔵・院内・阿仁・久根など、古河財閥の基礎を築きました。



帝国データバンク史料館 テーマ展示

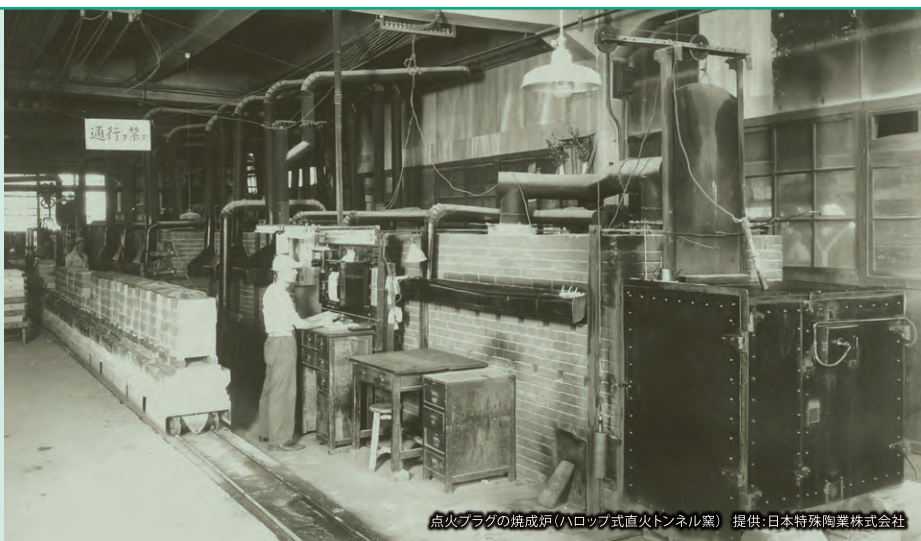
渋沢栄一と信用調査業

会期: 2024/12/27まで

展示では、渋沢栄一が信用調査業に残した足跡と、帝国興信所とのエピソードやゆかりの品、寄稿記事などを紹介します。

※開館状況・ご予約はホームページをご覧ください。





西欧技術の導入とユニフォーミティーの追求 日本窯業の近代化を推進した立役者

森村組をルーツとする企業群

セラミックス関連産業は、自動車産業をはじめとする日本のモノづくりを支えるとともに、我々の快適な日常生活に欠かすことのできない製品を提供している重要な分野である。現在、日本には、世界的なセラミックス企業がいくつか存在するが、このうちノリタケ株式会社、TOTO株式会社、日本ガイシ株式会社、日本特殊陶業株式会社の4社のルーツをたどると、明治初期に創設された貿易商社である森村組(現:森村商事(株))に行き着く。森村組は、陶磁器をはじめとする雑貨のアメリカ合衆国を中心とする海外への輸出を主な業務として発展した。実は、ノリタケの前身である日本陶器合名会社は、輸出陶磁器の品質の向上を図る森村組が貿易で稼いだ資金を元手に1904(明治37)年につくった会社である。また、東洋陶器株式会社(現:TOTO(株))と日本碍子株式会社(現:日本ガイシ(株))は、この日本陶器を母体として、それぞれ1917(大正6)年と1919年に設立された。さらに、1936(昭和11)年には日本特殊陶業が、日本碍子を母体として設立されている。江副孫右衛門は、これら森村組をルーツとする窯業企業の成長を主導した企業家である。

セラミックス関連会社の社長を歴任

江副は1885(明治18)年に伝統的窯業産地である佐賀県西松浦郡有田町の陶磁器製造業者の家に生まれている。本が好きな優秀な小学生で、同級には後に連合艦隊司令長官となる古賀峯一がいたが、成績では江副に軍配が上がったという。1909年に東京高等工業学校窯業科を卒業すると、日本陶器に入社し、1916(大正5)年には同社の技術部主任となる。その後、日本碍子が設立されると同社に転じ、1939(昭和14)年には社長に就任する。また、その間に日本特殊陶業が設立されると、その初代社長に就任し、さらに日本陶器、東洋陶器等いくつかの森村系の窯業関連企業の取締役にも就任して、辣腕を振るっ

た。戦後は、1947年に佐賀県有田町長に選任され故郷の産業振興などにもかかわるが、その後1949年には東洋陶器の社長に就任し、同社の再建に尽力した。

ディナーセットの開発

江副が深くかかわった森村系の企業の発展には、西欧からの新しい製品や技術の導入が重要な役割を果たした。地理的に遠く離れた西欧の、しかも企業が秘匿する傾向にあるさまざまな情報を収集・選定・伝達し、新しい製品の開発や品質の向上に結び付けることが、企業経営の成功のカギとなっていたのである。そのため、江副はいくたびか海外視察を行い、西欧の新しい製品や技術情報の収集に努めている。

はじめて江副が海外への視察旅行に出発したのは、1912(明治45)年7月のことである。当時、日本陶器は、ディナーセットの開発とその大量生産の実現に向けて、悪戦苦闘をくり返していた。同社の代表社員として実質的な経営にあたった大倉和親は、西欧の食文化と深く結びついたこの製品の導入の可否に結着をつけるために渡欧し、調



日本初のディナーセット(SE DAN) 提供: ノリタケ株式会社

査を重ねている中で、オーストリアのカールスバッドのヴィクトリア工場を視察できるようになった。そこで、急遽江副を呼び出し、ともに約2週間にわたる工場見学を実施し、ディナーセットの完成のために必要とされるさまざまな情報を学んでくるのである。帰国後の江副は、この時の成果を整理して、それをもとに研究・実験を行い、1914(大正3)年6月について完全な品質のディナーセットを完成する。それは、その後の日本陶器の発展と、それを起点とする日本の窯業界の近代化につながる重要な出来事であった。

アメリカへの視察

ディナーセットの最大の輸出先であるアメリカに江副が初めて旅立ったのは、日本碍子が設立された翌年の1920(大正9)年のことである。同社の工務部長となった江副は、電力事業の先進国であるアメリカの碍子技術について学ぼうとしたのである。約4ヵ月に及ぶ海外出張期間中に、江副はゼネラル・エレクトリックをはじめとする米国内の著名なガイシ工場を見て回ったが、この時の視察旅行の最大の成果は、後に日本特殊陶業の主要商品となるプラグに着目するきっかけをつかんだことであった。すなわち、帰国を前にした江副がデトロイトのチャンピオン点火栓工場を見学した際、偶然にもその日が日曜日であったため、担当の技術者などはおらず、そのため見学を拒否されることもなく、守衛がくまなく工場内を案内してくれたのだという。この視察旅行でアメリカの巨大な自動車工業の発展と、それを支えるプラグの大量生産工場を目の当たりにした江副は、日本の窯業分野が新たに導入・開発すべき製品について、大きな示唆を得たのであろう。1921年の春には、日本碍子内において、プラグの研究を着手させている。

さらに江副は、1927(昭和2)年にも欧米への視察旅行を行っている。当時、電力業の発展に伴い、送電電圧が上昇し、大量送電が実現されようとしていた。それに応えて、均一な品質を持つガイシの大量生産が必要となるため、トンネル窯を導入して、焼成方法の改良を図ることになった。トンネル窯とは、台車などに積まれた製品が、両側に焚口を有するトンネルを通過する間に、焼成と冷却を完了する連続的焼成装置をいう。今回の江副の海外出張の主目的は、トンネル窯の購入契約を結ぶことにあった。米国に渡り、各種トンネル窯の比較研究を行った江副は本社への報告を行い、それに基づいて、本社は米国ハロップ社のトンネル窯の導入を決定した。このハロップ式トンネル窯は、製品の均一化、すなわちユニフォーミティーの確立に大きく貢献したと言われている。

ユニフォーミティーの追求

食器をはじめとする伝統的な陶磁器生産は、職人的な熟練技術に依存して行われるところが大きかった。製品の評価においても、偶然にできた優良品に高い点数をつけるような曖昧さが、多分に残されているように思われる。しかし、日本陶器で江副が開発に取り組んだディナーセットは、正確な形状と色調の統一などが求められるため、近代的な工場において、組織的に行われる厳格な管理の下で生産される必

要があった。後年、ユニフォーミティーの鬼とも称される江副であるが、製品の均一性は日本陶器にいた時代から江副が追求した重要な課題の一つであった。

さらに、日本碍子に移った江副は、ユニフォーミティーの追求に没頭する。ガイシのような工業製品となると、寸法や品質が均一であることは、製品を市場に送り出すうえで、絶対的な条件となるからである。日本碍子では、会社設立後の間もない時期にユニフォーミティーの追求という理念が定着したとされるが、その背景には1921(大正10)年に実施された国内製品と外国製品の比較試験があったという。この試験は、154kV送電に際して外国製ガイシの採用を予定する大同電力に対して、江副らが日本碍子の製品を採用するよう働きかけたことをきっかけとして行われた。試験の結果は悪くなく、日本碍子の製品の性能は外国製品と比べて大きく劣ることのないことが判明し、大同電力からの受注も獲得した。ところが、江副はこの試験結果に満足することはなく、むしろ、アメリカのオハイオ・プラス社製品と比較すると、均一性の面で劣ることが確認された点を問題としたのである。

なお、江副は製品の開発や改良にあたって、常に外国製品との競争を強く意識していたように思われる。ロスアンゼルスオリンピックの開催された1932(昭和7)年のことになるが、日本碍子の従業員たちにオリンピックになぞらえて「プラグという種目で世界の強豪たちに勝ち、日章旗を掲げよう」という趣旨の発言をしたことが伝わっている。ともあれ、この比較試験をきっかけとして、ユニフォーミティーを追求する江副の姿勢はより厳しいものになった。その後日本碍子は、江副の指導の下で、それまでのカリ長石に替えて対州長石を使用したS素地の完成、プルダウン成形と呼ばれる自動成形機の導入、そして先述のハロップ式トンネル窯の採用などによる技術の改良を進め、ガイシ製品のユニフォーミティーの向上に著しい成果をあげたのである。

産地の中小企業への貢献

陶磁器業は、瀬戸、常滑、東濃、有田など伝統的な産地を形成して発展してきた産業である。おそらく、産地を構成する中小企業は、森村系の大企業が導入・開発するディナーセット、ガイシ、プラグなどの新製品やそれを製造する技術などに高い関心を抱いていたと考えられる。江副はそうした製品や技術にかかわる情報を、鷹揚に、場合によっては積極的に産地の中小企業に伝えていたようである。例えば、東濃の産地では、山庄製陶所を経営していた曾根昇三が、江副からハロップ式トンネル窯の築窯について、再三にわたり詳細な説明を受けている。その後、曾根はタイル製造の月星建陶社とディナーセットの白素地製造を行う曾根磁^{じそ}豊園製陶所を設立するが、それぞれの工場には、ハロップ式トンネル窯が導入されている。また、江副は、日本碍子の工場内を同業者に開放したこともあった。技術漏洩の問題を心配する会社の幹部を他所に、江副は情報が盗まれた時には、すでに「われわれは一步も二歩も先へ進んでいる」と断言し、自社の技術の先進性を維持することに自信を持っていたという。なお、江副と産地の中小企業の間には浅からぬ関係があったことは、1931(昭和6)年に主に中小製造業者の団体として結成された日本陶磁器工業組合連合会の商議委員会の会長に、彼が就任していることからもうかがわれる。西欧の先進技術を導入し、それを活用してユニフォーミティーの達成に成果をあげて森村系の企業の成長を主導した江副は、産地の中小企業に先進的企業のモデルを提示し、時に最新の技術などの情報を伝達・開示することを通じて、日本窯業の近代化の促進に大きく貢献した企業家であった。



点火プラグ第1号 スパークプラグ 提供：日本特殊陶業株式会社

金融機関における 信用調査の歴史と 信用調査機関

資料にみる
企業の歴史

企業経営を行う上で多くの企業が信用調査を行っています。代金回収のリスクを少しでも減らすため、支払い能力はあるか、債務超過に陥っていないか…など、取引の際には相手の信用を見極めることが重要です。信用調査とは、相手の財務状況、経営状況、取引履歴などを調査し、その信頼性や信用度を評価することです。信用調査は、主に審査部など信用管理の部署が担い、調査の一環として専門の信用調査機関に調査を委託します。特に銀行では、貸付業務において借り手の支払い能力を判断するための信用調査は、重要な業務の一つです。金融機関における信用調査の歴史と、信用調査機関との関係について、最新の研究と共に振り返ります。

アメリカの銀行の信用調査部 勝田貞次(『銀行の発展策と信用調査方法』国会図書館デジタルコレクション)

両替商の信用調査

今年2月に、江戸時代の金融機関、三井大坂両替店における信用調査の実態を、丹念な資料分析のもとに紐解いた書籍が刊行されました。三井文庫研究員の萬代悠氏による『三井大坂両替店 銀行業の先駆け、その技術と挑戦』(中央公論新社、2024年)と同氏『三井大坂両替店の顧客信用情報 享保一七年から明治二年まで』(勉誠社、2024年)の2冊です。前者は新書として手に取りやすく、後者は本格的な資料集となっています。

新書のあとがきでも触れられていますが、これまで江戸時代の信用調査については、林玲子氏が通史シリーズ『日本の近世5 商人の活動』*1において触れられている他は、ほとんど研究がありませんでしたので、両書により江戸時代の信用調査の実態が明らかにされたのは、非常に画期的なことです。

両書によれば、三井大坂両替店では、借入希望者に対して信用調査である「聴合ききあわせ」を行い、その調査内容を『聴合帳』に記載しました。『聴合帳』には、調査項目として担保内容、顧客の素性や素行、年齢、人柄、商売の内容、家計状態(身上、身体向)などが記され、この記載内容をもとに重役手代が借入の可否を審査しました。

調査項目は現在より少なく、形式も簡易なものですが、例えば、家計状態(身体向)が「よし」なのか「よろしからず」なのか、借財があるかどうか、訴訟中や休店・絶家状態ではないかどうかなど、判断の際に重視する部分はそれほど変わっていません。

まだ会社も誕生していないこの時代、借入を希望する主体は「ヒト」であり、融資の諾否の判断には特にその「人柄」が重視されていました。『聴合帳』には「至極実体」「人柄よろし」「身持不埒」「利発の仁」「山師」「よほど温厚」など、さまざまな表現が並んでいます。

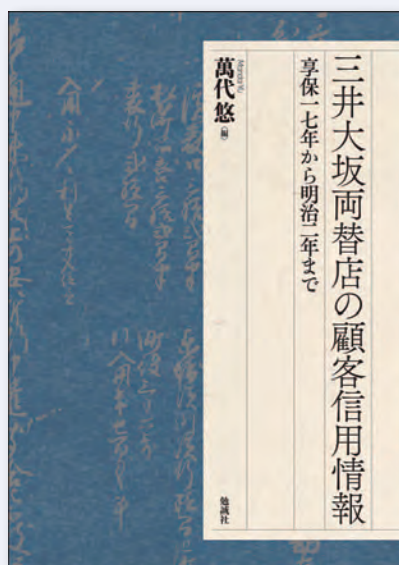
萬代氏は、江戸時代には三井大坂両替店が行っていたような信用調査が全国で行われていた可能性を指摘しています。専門の信用調査機関が設立される遙か以前から、両替商によって日常的に信用調査が行われていたと思われる。

銀行のための信用調査機関

1882(明治15)年、日本銀行の初代大阪支店長に就任した外山脩造は、約束手形の割引を奨励していくなかで、手形の普及のために信用調査の必要性を強く感じていました。おそらく念頭には、両替商が行っていた信用調査の存在があったと思われる。外山はその後、欧米を視察するなかで、信用調査を専門に行う会社の存在を知り、帰国後、1892年に日本初の信用調査機関、商業興信所を創設します。

商業興信所と、渋沢が興した東京興信所は、日本銀行と複数の発起銀行の出資を受けて創立し、加盟銀行からの加盟金によって運営する非営利機関として始まりました。手形交換所、銀行集会所、銀行倶楽部、興信所の4つの機関は、銀行の共同的機関として設立され、銀行とは切っても切り離せない関係にありました。経済が発展し、企業の数が増え、取引の規模や範囲が拡大すれば、銀行内部の調査だけでは賄えなくなります。それを補う信用調査機関は、まさに銀行による銀行のための機関でした。

帝国興信所も、設立時の賛同者の大部分は銀行関係者であり、創業当時発行していた雑誌『商海時報』の掲載広告もすべて銀行によるものでした。



信用調査部門（審査部門）の設置

銀行では、明治末頃まで、独立した審査部門をもたずに貸出係が信用調査を兼務することが多かったようです。明治末から大正期にかけて、貸出係から信用調査係（審査係）が独立し、より審査体制が強化されていきます。

大正期には、銀行における信用調査について体系的に考察する書籍が相次いで発行されます。銀行調査の重要性や独立した信用調査部門を置くことの必要性を論じ、アメリカの信用調査の在り方や具体的な業務内容について紹介しています。当時すでに信用調査体制が発達していたアメリカの信用調査部門の組織や調査方法をモデルに、審査体制の強化を図ろうとするものでした。

日本でも、大銀行ではすでに信用調査部門が設置されていました。特に大規模に信用調査を行っていた大阪住友銀行本店調査部では、約40人の部員中35人が信用調査に従事していたといえます。

大正期の信用調査業務

1926（大正15）年の勝田貞次『銀行の発展策と信用調査方法』には、信用調査部の業務は「顧客の金融状態、性格、業態、資力、技量などに関する正確なる材料を系統的に収集し、それを年代的によく整理し、且つ何時にても参照し得る様にファイルに保存して、そのファイルを一見する人をして直ちにその銀行の顧客の過去より現在に至るまでの経歴、業態、人格、技能、資力の一切を窺知得さしむる」ことであり、信用調査資料を（1）収集、（2）整理、（3）保存するものであるとしています。

信用調査資料（入手元）には、①貸借対照表、②興信所の報告、③同業組合、④反対商、⑤銀行（取引銀行）、⑥市場（市場流語）、⑦本人（直接会見）、

⑧自行（取引振）、⑨新聞雑誌（直接記事並びに間接的類推）の9種類を挙げています。これらの資料を収集、ファイリングし、要旨をまとめた信用調査票を作成し、審査の材料にします。信用調査票の書式は銀行によって異なりますが、例として、個人・商工業者・会社・銀行の4種類の書式が示されています。左下の画像は個人と会社の信用調査票のサンプルです。会社の信用調査票の方が項目が多く、「ヒト」に関する項目は少ないですが、両者とも当行との取引関係の部分が大きな割合を占め、関係事業や信用程度、取引銀行など共通する項目も多くあります。

興信所の調査報告書も審査のための重要な判断材料でした。興信所の報告は調査対象の大体の輪郭を捉えるには便利ですが、簡易なことも多いため、自行の調査部の報告を興信所の調査と比較することが最良であるとしています。興信所を利用するメリットとして、調査員が熟練者であることと、調査網の規模や調査報告書作成のノルマにより安価で早く情報入手できることを挙げています。興信所の熟練した調査員に対して、審査部の調査員は異動があるため経験が蓄積されにくいことをデメリットとしながらも、接客や取引事情に詳しくなるなど信用調査で得た経験は他の職務にも大いに役立つものと評価しています。

興信所の調査報告書は、銀行の信用調査を補う必須のツールであり、銀行と興信所は密接な関係にありました。

興信所の調査報告書

銀行が重視した興信所の調査報告書とはどのようなものだったのでしょうか。大正期の帝国興信所の調査報告書には、「屋号」「職業」「開業」「正味身代」「資産」「負債」「年商内高又ハ収入高」「使用人数」「性格及素行」「盛衰」「信用」「当所の所見」「取扱品」「主なる仕入先」「代金支払方法及支払振ノ良否」「主なる販売先」「代金受入方法及売掛回収ノ良否」「営業振」「取引銀行及金融状態」「家庭」「既往及現状」などの項目があります。銀行の信用調査票の項目と比較して大きな差はありませんが、項目によっては詳細な記述もあり、自行の調査のみでは得られない情報も多分に含まれていたと思われます。

例えば、経営者の「性格及素行」には、「性剛直にして吝嗇、素行普通」（性格は剛直でケチ、素行は普通）「実直伶俐なり」（誠実で切れ者である）など、調査員の目による具体的な記載があります。現在も経営者の人物像には「慎重」「包容力がある」「カリスマ性に富む」「積極的」「独創的」「堅実」「人情味に厚い」などの選択肢があり、経営者についての項目は、経営資源3要素「ヒト」の中でも、特に重要な要素として信用評価の判断基準の一つになっています。

帝国興信所の調査報告書（1925年）



- ※1 林玲子「日本の近世 5 商人の活動」(中央公論社、1992年)
- ※2 阿部斗斗「アメリカの銀行の信用調査制度(一)」『企業会計』9(9)、中央経済社、1957年

【参考】

- ・勝田貞次「銀行信用調査の研究」(文雅堂、1922年)
- ・勝田貞次「銀行の発展策と信用調査方法」(大同書院、1926年)
- ・銀行研究社編「信用調査組織の基準」(文雅堂、1926年)
- ・銀行研究社編「信用調査部の組織と運用」(文雅堂、1929年)
- ・齊藤壽彦「戦前における銀行の貸出審査・信用調査と興信所(上)」『銀行法務』21,44(3)、経済法令研究会、2000年
- ・齊藤壽彦「戦前における銀行の貸出審査・信用調査と興信所(下)」『銀行法務』21,44(8)、経済法令研究会、2000年
- ・霧野誠良「日本におけるリレーションシップ・バンキングの展開 一 支店銀行化の関連で」『金融経済研究』43、日本金融学会、2021年

第一表

信用調査票 (個人)

此名 大正 年 月 日 単位千圓 調査所

職 業	資 産		負 債		當行トノ取引關係	
	実領現金	実貯手形(借)	実貯手形(借)	実貯手形(借)	取引開始	種 別
住 居						
家 産						
年 齢 性 行						
家 業 種 別						
地 位						
課 務 専 業						
信用程度						
取引銀行						

第三表

信用調査票 (会社)

社名 大正 年 月 日 単位千圓 調査所

業 務 種 別	資 産		負 債		當行トノ取引關係	
	実領現金	実貯手形(借)	実貯手形(借)	実貯手形(借)	取引開始	種 別
株 立						
資 産 所 属						
電 器						
火 災 工 業						
汽 車 運 送						
商 業 種 別						
地 位						
課 務 専 業						
信用程度						
取引銀行						

信用調査票のサンプル(上：個人、下：会社) (銀行研究社編「信用調査組織の基準」)



〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町14-3 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

- [入館料] 無料
- [開館時間] 10:00～17:00 (事前予約制)
- [休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始
(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

- [JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分
中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分
- [地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分
丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し付けください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp